

## 「人文学部開設30周年記念」特集号の刊行に寄せて

人文学部長

奥谷浩一

このたび人文学部開設30周年を記念して、『札幌学院大学人文学会紀要』第86号に特集号を組んで発行する運びとなりました。お忙しいなかにもかかわらず、力作をお寄せくださった諸先生方のご努力に心から感謝申し上げます。

ご承知のように、私どもの札幌学院大学人文学部は、その前身の札幌商科大学時代の1977年4月に開設されましたので、一昨年すでに開設30周年を迎えています。本来であれば、開設30周年の節目の年である2007年に記念の諸行事を行い、『札幌学院大学人文学会紀要』にも記念の特集号を組むべきでしたが、諸般の事情によって、私が人文学部長になって初めてこれらの行事を提起して取り組むこととなった経緯もあって、開設記念講演とシンポジウムは一年遅れの昨年11月8日に開催され、記念特集号の方はさらに二年遅れてこの第86号を刊行することになりました。しかし、その結果として集まった論文の投稿数が御覧のようにわずか10本ということでは、記念特集号の発行を手放しで素直に喜ぶわけにはいかないでしょう。

このことは、今から10年前の人文学部開設20周年の時と比較してみれば、一目瞭然です。この時は、まだ人間科学科と英語英米文学科の2学科であったので、『人文学会紀要』第60号に「特集・人間科学の現状と課題」を組んで、論文数14を掲載し(このうち英語英米文学科教員による論文が2本)、一年後の同紀要第62号には「特集・英米の言語と文化」を組んで、論文と研究ノートの記事数が16本(このうち人間科学科教員による論文が3本)でした。しかも、この時はこの二冊を特別装丁本として発行したばかりか、第63号と同時に、人間科学科の人文学部開設20周年記念行事である「第3回人間科学フォーラム」の個人研究発表およびシンポジウム、そして同じく英語英米文学科の記念行事である「21世紀の英語教育を考える」のシンポジウムの両方を『人文学会紀要』第63号に収録したわけですから、いかに全学部をあげて記念行事と論文掲載に努力を傾注したかがよくわかります。これと比べると、30周年記念行事では、英語英米文学科独自の催しを追求することを呼び掛けながら、ついにこれを実現できなかったばかりか、紀要においてもいかにきわめて少ない論文の投稿にとどまったかが明らかです。その後10年を経て、人文学部ではさらに臨床心理学科とこども発達学科の二学科を増設して教員数が増加しているにもかかわらず、このような有様ですから、大変残念ながら、人文学部の開設記念と関連する行事と研究の面での停滞は顕著といわなければなりません。その原因はいったいどこにあるのか、学部全体として考えていただきたいと思います。

もちろん、こうしたことの責任は学部構成員の研究を促進すべき立場にある人文研究部会長である私が負うべきでしょう。しかし、私が研究部会の総会で昨年度中に二度『人文学会紀要』記念特集号を組むべきだと提案したにもかかわらず、これを否決して、準備期間が不足であるとの理由から二年遅れで一回の特集にしようという修正案を決めたことがあってこういう結果を生んだことも否定できないでしょう。目標を高く掲げずに低いところに設定した時点ですでに教員の意識のうえでの後退が始まっていたのだといわなければなりません。総合研究所を開設して新たな組織作りをしたとしても、それが真に学部の教員の研究を推進することに役立つということであれば、新しい組織替えをした意味がないということにならざるをえないのではないのでしょうか。

18歳人口の激減と大学全入時代の到来というきわめて厳しい時代を迎えて、これからの弱小の私立大学に要求されるのは、基本的には学生一人一人にたいする丁寧な教育、教員一人一人の研究面での実績向上、そして社会貢献という三つの柱です。これからますます厳しい時代を迎えるにあたり、これら三つの場面で教員一人一人が今まで以上の奮闘をしなければ、弱小私立大学がこの競争時代に生き残ることはできません。私は口を酸っぱくしてこう訴えざるをえません。これからは、教育と社会貢献のみならず、研究面においても後退があっては断じてならないのだ、と。

本学と人文学部がこの先も生き延びることができるとすれば、2017年には開設40周年を迎えることとなります。その時に今回のこのきわめて残念な経験が生かされ、二度と同じ轍を踏むことのないように、人文研究部会会員一同の猛省を望む次第です。